

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 320 回 中学生の「税についての作文」募集

2009.7.12

毎年この時期になると、全国納税貯蓄組合連合会（全納連）と国税庁が共催で、中学生の「税についての作文」募集事業が始まる。納税貯蓄組合とは「納税貯蓄組合法」（昭和 26 年法律 145 号）に基づく団体で、納税資金の備蓄による各種税金の円滑な納付を目的として組織された団体。平成 21 年 3 月末現在の納税貯蓄組合（単位組合）数 5 万 4 千組合、組合員数 259 万人といわれている。（全納連ホームページより <http://www.zennoren.jp/profile.html>）

中学生の「税についての作文」募集事業は、納税道義の高揚のため租税教育の一環として、昭和 42 年以来、全国の中学生を対象として、その募集活動に取り組んできたものだ。平成 20 年度 全国 7,109 校から 512,873 作品の応募を頂いた。応募された作品は、「地区納税貯蓄組合連合会及び税務署」、「都道府県納税貯蓄組合連合会」、「局納税貯蓄組合連合会及び国税局」の審査を経て、「全国納税貯蓄組合連合会及び国税庁」が審査し、入選作品を決定。数あるコンクールの中で、内閣総理大臣をはじめ財務、総務、文部科学の 4 人の大臣賞があるのは、これが唯一である。

実は小生、この事業に 10 年ほど前から参画している。今、毎週のように熊谷税務署管内 30 中学校、地区教育長、各校長会や PTA 連合会等に、応募協力をお願いに回っている。

先生方とお会いして感じることは、我々日常的な社会と教育の現場が、いかに隔離された別世界であるか、恐縮ではあるが、そう、率直に思わざるを得ない。

中学校 3 年間の教育課程の中で「税金・財政」に関する授業は、およそ 2~3 時間と聞いている。将来国を担うべき中学生に、国を支える租税のことをしっかり教えていない国家は、世界中滅多にない、「日本の常識・世界の非常識」の最たるものである。教えるべき学校は、施設や備品・教材も、先生方の給料さえも、その殆んどは税金で賄っている。この中学校で基本を教えない限り、子供達はどこの機会でも学ぶことができるのだろうか。

そんな先生方から質問があった。

「税金の授業は中学 3 年の秋、今はまだ教えていないので、募集時期をずらすべきだ」

「夏休みは色々なところから作文や標語、絵画等の募集があり、やってられない」

「税金云々を言うのなら、政治家が襟を正してからで、教育上好ましくない」

「中学校別の募集状況一覧表はいただけない。競争原理を煽り差別につながる」...等々

教えてないのは誰のせい！それでも応募してくる作品は、インターネットで自ら調べ、お父さんやお母さんと税金の話を家族で語り合い、自分の熱い思いを 3 枚の原稿用紙にまとめてくる。自主的能力を育むことは、教育ではないのか！！

政治家が襟を正して...と、租税教育の必要性の議論は全く観点が違う。世の中斜めに見ている人に、大事な子供の教育を任せているとしたら、空恐ろしい、鳥肌が立つ思いである。

競争原理を煽るために一覧表を作っているのではない。結果を客観的に公表しているに過ぎない。個人情報ではないし、先生方の査定や評価では全くない。今後の参考と糧にすればいいだけの話であり、何をそんなに恐れているのか？ 現実社会は、精神的特殊世界の「学校」以外、競争は付き物であること、先生も学ぶべきだと思っている。歪曲された平等・差別意識を植え付けられた子供達が、いかにも不幸で可哀想で、仕方がない。

それでも実は、多くの先生方が理解し、ご指導・ご協力を頂いている。租税教育の中で「自ら書く」という作文応募は、一方的受講型の租税教室とは一味違っている。殆んど無知な中学生が、自分の力で本気で作文を書くことの重要性...だから納貯活動の遣り甲斐が、ここにあると思っている。